様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　4 月　22 日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2012
課題番号：21520525
研究課題名（和文）　遠隔チューターによる海外日本語学習学生の学習環境調査

研究課題名（英文）　Investigation on Learning Environment of Japanese-Language Students supported by Distance Tutoring

研究代表者 吉田　雅巳　　（YOSHIDA MASAMI）
（千葉大学・大学院人文社会科学研究科・教授）
研究者番号：80221670

研究成果の概要（和文）：本研究では，海外の日本語学習者・指導者と同期型，非同期型の学習支援交流を試行することにより，学習者の学習環境，オンライン環境の利用の特性，交流の特徴について分析を行った。その結果，オンラインでの学習の拡張，教育ポータル以外のＳＮＳなどへアクセスの拡大，遠隔環境下での特徴ある交流のパターンを同定した。さらには，将来の日本と海外との国際遠隔交流のあり方について考察した。
研究成果の概要（英文）：In this investigational study, the author conducted tryouts of distance assistances for Japanese-language learners and instructors in overseas by using both synchronous and asynchronous mode of communication. And, the author analyzed learning environments of learners, characteristics of utilization of services in cyberspace, and characteristics of online communication. As results, the author identified expanding learning in online environment, increased use of Social Network Service outside the educational portal sites, and typical patterns for distance communication. Finally, the author concluded strategies for near future distance communication between Japan and overseas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学
キーワード：教育工学・教材・教育メディア，ウェブカンファレンス，国際共同

１．研究開始当初の背景

世界的規模での地域連合に見られる活発な経済交流は，情報交流や人材交流などの様々な域内依存関係を深化させていた。また，このグローバル化に呼応して広がる知識基盤社会や人材開発への貢献を目指した大学の国際化の在り方の研究は喫緊の課題となっていた。

一方，教育言語として，初等教育から博士課程レベルまでの学術内容を網羅できているのは，英語に加えて，ロシア語，中国語，日本語に留まっていた。そして，世界の日本語学習者は，過去 10 年間倍増傾向で，日本語は特にアジアの知識を伝える言語として注目されている外国語となっていた。そして日本語教育の果たす役割は，日本の経済活動の

世界的流動化への対応に留まらずに，日本由来の知識の世界的貢献の基盤となるもので，実現可能で具体的な日本語教育の国際化戦略の立案・推進が求められていた。
本研究で研究共同した教育省の管轄するタイ国は，数多くの日本語学習者が存在する国として知られるが，これを指導する日本語母語話者教員は限られ，特に地方の大学で学ぶ学生の，日本語母語話者や日本国内の情報との接点が限られていた。反面，現地社会の実用的日本語の育成の要請や，日本のサブカルチャーの流入に影響された日本への留学希望者の増加の影響で，現地ホームページ(HP)の域内日本語情報は膨大化していた。IT 知識マネージメントの観点から見ると，情報量の両国での膨大化がある状況では，利用者の体験の相互交流を啓発し，質の不確かな情報の洪水を交流の中で精選し，オンラインの学習利用の質を高度化することが必要であった。本研究は，これに組織的に取り組むものであり，実践的試行研究により日本語学習での遠隔交流の実際について調査した。

２．研究の目的
本研究では，主に海外の地方の大学で日本語を学ぶ学生・指導者と同期型のウェブカンファレンスや非同期型の教育ポータルサイトを通してメッセージ交換を行い，学習支援や交流場面を通した記録の収集を行い，日本語学習者の学習活動へのオンライン交流の影響を分析することを狙った。交流記録の分析では，これまで資料の乏しかった地域の大学での日本語学習者の学習環境・日本語使用の特性を調査した。さらにサイバースペースで拡張した日本語学習方法の在り方を解明する事を目的とした。

３．研究の方法
本研究では，　タイ国教育省が実施するタイランド・サイバーユニバーシティプロジェクトと共同して研究を実施した。

教育省のポータルサイトのフロントページに掲示された日本語交流サイト

非同期型交流の試行では，教育省の管轄する教育ポータルサイトで運用しているｅラーニングシステムを活用した。教育省が運用する 700 余りのｅラーニングコースの中に，日本語学習者の遠隔支援・交流の場を１コースの形として導入した。

交流サイト

そして，日本語支援コース内の交流情報管理を日本で管理するサーバーを組込運用させた。そしてｅラーニングシステムの機能に連動して，マルチメディアデータ・メッセージの交換機能，高度なデータ管理や検索機能を付加して，長期運用・交流調査を実施した。表面的には日本で運用しているサーバーシステムは利用者には全く意識されない構成であると同時に，学習者の学習活動履歴はｅラーニングの機能により自動記録することが可能になった。
メッセージボード型の交流記録は，データ検索サービス機能が備わり，記録を学習利用することも可能で，研究・調査では，交流場面だけではなく，訪問・記録の検索・閲覧のみの活動も含めた学習活動のデータ化・分析を行った。
試行では，教育・技術・運営各面からの支援施策のありかたを検討した。教育省を通じて全大学の日本語学習学生・指導教員に母語話者と交流できる場の周知・振興を行った。利用者へのオンラインアンケートも実施した。

一方，タイ国教育省が保有する日本製の高性能ウェブカンファレンスシステムを活用し同期型交流や学習支援を試行した。交流記録としてビデオプロトコルを記録しその分析を実施した。

同期型学習支援の場面（学習者側）

メッセージ交換での分析観点
参加者が行う学習と，社会で要求される日本語能力や留学に必要な日本語能力との間を

俯瞰する機会を提供し，社会的ネットワークや協調行動などを通して生まれるオンラインツールの活用の様子を観察する。特に，日本の日本語学習関連サイトが使われたり，現地の日本語学習サイトが交流を通して見直されたりするインターオペラビリティ（相互運用性）発生のプロセスに注目し，分析する。
遠隔チュータリングの分析手法
交流内容に出現する会話ストロークをカテゴリー化，パターン化して研究対象化すると共に，解決に向かうプロダクション（交流の手続き）ルールの解明を行った。

４．研究成果
平成 21 年度には 2 つの領域において研究活動を実施した。
A: 遠隔国際日本語交流の基盤となる技術・教育・経営の整備
B: 国際日本語交流実態データの収集と分析
A について
地域の学習者と同期型交流による「遠隔チューター」実現のため，教育省内のウェブカンファレンス用リフレクターサーバーの調整を行い，専用ポートを設置した。別に，教育省のｅラーニングシステム内に本研究で用いる日本語学習情報交換・議論を展開する多機能掲示板を含むサイトの設置を行った。これにより，参加者の認証管理・行動記録がｅラーニング機能を使って実現できるようになった。また，交流サイトは教育省 HP のトップに掲載され，教育省を通して全国の大学に広報文の頒布も行われた。また，タイでの学習記録データを，日本のサーバーに記録できるように調整した。
B について
「遠隔チューター」を担当する際に必要な交流のノウハウについてまとめた。交流の際に用いる素材として，これまでの研究で収集した日本語教育関連ウェブサイト情報，学習材資料の整理を行い，学習情報を交換し合う協調行動の準備を行った。試行的にオンラインで日本語学習者との交流を実施し，データを記録した。

平成 22 年度には，同期型交流で国際的な試行を実施した。さらに日本側の研究協力者（日本語教育専門の博士学生）を組織し，海外共同研究者（タイ国教育省，フランスグルノーブル第三大学日本語教育科）も増やした。そして交流記録の映像記録の談話分析を行い比較した。さらには観察された談話内容のカテゴリー化を行った。非同期型交流では，学生の参画しやすい環境の構築と，日本で知られる日本語関係サイト紹介の可能性と意義について試行を通して研究した。交流記録を「表示」(提供情報)，「交流」(カンファレンス，掲示板)，「関連」(ディレクトリ）の各機能に分け，それを支える機能に 3 層構造（レイヤ）のコンポーネント「教育層」「情報通信交流技術層」「教育経営層」を網羅してインターオペラビリティ（相互運用性）の向上のための基礎資料を作成した。
成果を英文での学術報告にまとめ，国際会議で協同発表した。

平成 23 年度には，同期型遠隔交流における談話ストロークの研究を発展させた。集めた記録をもとにした談話分析で交流パターンの解明に取り組んだ。特に談話のアプロプリエーションを，交流・学習支援の形態と対比して同定した。談話の始まりではパラ言語学的であったが，交流が進むと会話維持の機能が働いて，サバ(Saba, F., 1999)のシステムダイナミクスモデルとの一致を見た。
また，非同期の交流で提供している学習環境の利用実態調査と，学習者が個別に活用している外部サイトの活用を比較した。特に，ブログや SNS 等のオンライン上に分散する情報の利用では，情報の取得に加えてフリーミアムなどのオンラインサービスを積極的に活用し，学習者がオンライン体験を学習環境に持ち込むインターオペラビリティ（相互運用性）の様子が観察できた。他方，日本の大学が，今後国際教育連携を遠隔的手法で組織的に取り組む際の，環境整備に必要な要件を資料化し国際学術会議で公開した。

24 年度は，主に本研究調査の結果より得られた知見から，国際教育交流を遠隔的手法で組織的に取り組む際の，教育・経営・技術についての環境整備要件をまとめた。そして日本語学習支援交流環境の維持・管理に必要となる各層（教育層，情報通信交流技術層，教育経営層）での整備および機能の高度化戦略について議論した。
さらには，遠隔学習環境での交流についてもまとめを行った。遠隔交流や遠隔接触場面と通常の学習・指導との違いについて学習理論の観点より考察した。同期型交流では，パターン化を通して，プロダクションルールの解明を行った。タイ以外の海外の大学との交流も実施し，遠隔交流環境下での談話のアプロプリエーションの機能や，学生が得た情報の概念化を深化する過程について比較し，成果を学術雑誌で公開した。一方，非同期型交流では本研究のサイトのようなサービスと社会的に展開する SNS などのオンラインサービス活用の実態と関連について考察した。そして，そこで学習者に期待される能力と，提供するサービス内容のコモディティ化の在り方についてまとめ成果を国際会議で公開した。

まとめ

本研究に参加した学習者の日本語能力を調べたところ多くが初心者で，1・2 級レベルのユーザーは 24%あまりであった。参加者の日本語を学ぶ動因としては，交流能力の向上と日本のサブカルチャーへの興味が多くみられた(共に 20%程度)。学習環境に母語話者教員が存在するのは僅かに 8%であった。
好みの学習モードについては非同期型交流に参加した半数以上(52%)が他者から干渉されずに自分で学習するモードが好きであった。一方 28%が独学で勉強することの困難を感じていた。非同期型交流のｅラーニングシステムの記録から，平均 54.4 回の参加者のアクセスと，学習教材ボードを中心とした閲覧(平均 34.2 分)が観察された。ポータルサイトでの Q&A や交流メッセージの交換よりは，情報取得に時間が使われ，サイトのリンクから他のサイトを利用したり（68%），他のサイト利用を併用したりするなどの行動(54%)が観察された。現在では世界的規模で日本語教材が流通しているため，ある特定のサイト利用に固執するのでなく学習者側が自ら学習方法を選ぶ様子も観察できた。
同期型交流の分析からは，特に自由会話での調整行動の重要性と困難が見られ，学習者の自律的な会話構築の力の重要性が抽出された。
地域の日本語教育の実際ではテキストを中心とする静的なインプットが中心で，例えば国際交流基金の調査に見られる日本語教育での課題では授業教材の不足が最も大きな課題(51.7%)として報告されていた。そのため，これまで個々の学習者の自律した活動より生まれる学習環境を考慮した動的なインプット・アウトプットに焦点が当てられる機会は少なかった。本研究での調査環境は，学習者自身がコミュニケーション場面を開始・選択することができる遠隔接触場面の効果を試行すると同時に，記録より必要な学習者の交流能力や情報活用能力を明確化し，限られた教室環境や日本語母語話者の少ない地域において，新たな学習ツールの振興を提案するものである。またそれに伴い，これまで国内・海外や教室内・教室外と二分化してきた日本語談話環境への認識も徐々に変えていく必要があるだろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５件）

① 吉田雅巳，LMS の改訂と ｅラーニングによる国際教育事業の振興，千葉大学教育学部研究紀要，60 巻，151-157 頁，2012，査読無

② Yoshida, M., Formulate Social Media into Media Information Literacy, Paper Presented at International e-Learning Conference 2012, Thailand Cyber University, Ministry of Education, Thailand, At IMPACT Convention Center, June 14-15, Proceedings pp.32-37, 2012, 査読有

③ Yoshida, M., Thammetar, T.,and Theeraroungchaisri, A., Expanding Scalability of Learning by Cloud Service and Social Media, Paper Presented at the National e-Learning Conference 2011, Thailand Cyber University, Ministry of Education, Thailand, Cd-ROM, pp.35-42, 2011, 査読有

④ Yoshida, M., Yoshida, M., Thammetar, T., Sombuntham, S. and Theeraroungchaisri, A., A Study on Online Assistances for Japanese-Language Education, 9th Hawaii International Conference on Education, Proceedings pp.1412-1421, 2011, 査読有

⑤ Yoshida, M., Yoshida, M., Study on Effective Questions in the Japanese-Language Classroom, 9th Hawaii International Conference on Education, Proceedings pp.1838-1846, 2011, 査読有

〔学会発表〕（計　２件）

① Yoshida, M., Curation for the Media Information Literacy, Paper presented at The 28th Annual Conference of JSET, At Nagasaki University, Proceedings pp.1011-1012, 2012.

② Yoshida, M. and Thammetar, T., Promoting International Academic Cooperation by the Impact to Externalities, Paper Presented at International Academic Seminar in Sino-foreign Education Exchange. To Promote the Internationalization Process in Education: With International Vision and Quest for Innovation, Proceedings pp.359-369, 2011, 招待講演

〔その他〕

ホームページ等

本研究で作成した日本語学習者の交流サイトはタイ国教育省管轄のポータルサイト内で運用されている。
http://www.thaicyberu.go.th/

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　雅巳（YOSHIDA MASAMI）
千葉大学・大学院人文社会科学研究科・教授
研究者番号：80221670

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：